

特集：矢作川環境誌としての枝下用水史

## ＜教材＞としての枝下用水

～社会科副読本において枝下用水はどのように語られてきたか～

Shidare Yousui as teaching material: With a focus on the description of side readers of social studies in elementary school

川田牧人

Makito KAWADA

### 要 約

本稿は、豊田市の地域教材である社会科副読本においてとりあげられた枝下用水の記述をめぐって、そこから読み取りうる地域イメージの生成要因について考察する。とりわけ、枝下用水に関する記述が著しく増量された1982（昭和57）年版以降の記述について、その作成過程に立ち入って検討する。社会科副読本対象者である児童・生徒にとって身近で具体的に考えるための教材として、枝下用水はきわめて良質であるとともに、教材研究・開発を担当した教諭の意図やねらいを読みとることができる。と同時に、枝下用水がある種の地域表象として用いられる側面をも示しており、対明治用水流域との対外的要因や工業化などによる産業構造の変容などの内部的要因も考察の対象となる。本稿ではそれらから「地域を」考えることと「地域で」考えることという、地域研究における二種の見解の乖離状態を架橋することを試みる。

キーワード：枝下用水，社会科副読本，郷土教育，地域教材

### 1. 郷土の周辺

本稿は、豊田市の地域教育教材においてとりあげられた枝下用水の記述をめぐって、そこから読み取りうる地域イメージがどのような要因によって生成され立ち上がってきたかを顧みるものである。地域教育教材とは具体的には豊田市の小中学校で用いられる社会科教材（副読本）である<sup>1)</sup>。学校教育の教材として用いられるような地域の特徴を典型的に示す特定事象をとらえようとするとき、「郷土教育」や「郷土研究」などの諸活動を経由して、「郷土」なる概念に焦点をあてる必要があると思われる。資料の中身を検討するに先だって、まずは郷土概念と社会科教材との関係を簡潔に概観しておきたい。

身近な生活地域に関する資料や情報にもとづいた「副読本」、「副教材」と呼ばれる類の、教科書とは別のテキスト<sup>2)</sup>を用いた授業を受けた経験は、どの地域で義務教育を受けていても多かれ少なかれ共通しているであろう。その直接のはじまりは後述するように戦後教育であるが、もう少し長い時間幅を考えれば、1930年代の

郷土教育運動あたりまでを射程におさめることができよう。岩崎正弥によれば郷土教育運動とは、土の教育運動、デンマーク型教育運動とならんで土地に根ざした教育運動の一翼を担うものであり [岩崎・高野 2010]、尾高豊作や小田内通敏を中心としつつ、文部省による予算措置を伴いながら大規模に展開されたものだった。そしてそれに影響を与えたのは、「近い所」の「小な事」に着目しようとする新渡戸稲造の地方学の発想であった [岩崎・高野 2010:88]。この地方学と柳田國男が出会い、彼らの共同研究の合流地点としての郷土会の活動を通して郷土研究じたい、さらには柳田にあっては民俗学研究の方法を鍛え上げていったことが指摘されている<sup>3)</sup> [関 1993]。

1910年代の郷土会を中心とした活動、とりわけ1918年の有名な相州内郷村共同調査などをへて、柳田國男は郷土研究を体系化・方法化していく。1925年時点で、彼は次のような要件を指摘している。

「一、最終の目的はどんな大きくてもよいが、研究の区域はできるだけ小さく区劃して、各人の分担をもって狭く深く入って行くこと。

二、その便宜のためには、なるべくは自分の家の門の前、垣根のへりから始めて、しだいに外へ出て行くこと。すなわちよくわかるものから解らぬものへ進むこと」[柳田1925[1976]:203-204].

ここに示されている「小さな区劃」や「家の門の前、垣根のへり」といったイメージから、現在の社会科副読本で取りあつかわれる郷土の暮らしや事象を想像するに難くはないであろう。

柳田と新渡戸の仲介役となったとされる小田内通敏[野澤 2008:130]が人文地理学の立場から主導した郷土教育運動に関して、しかしながら柳田は先鋭に対立することになる。その原因は端的にいえば、郷土を対象とみるか方法とみるかのちがいである。郷土教育運動において、微小に区画化された郷土は研究の対象であり、目的であった。野澤秀樹によれば「郷土は国土の、さらには地球の一部」[野澤 2008:136]であるがゆえに、郷土を研究すること自体が目的化されてしまう。それに対し柳田の郷土研究は、最終単位を小さく画定する手続きにおいては近接するが、その後に郷土ごとに「比較」し、日本全体規模において「総合」するための方法としての郷土であり、「柳田の郷土研究は、単一の郷土のみを研究するのではない」[野澤 2008:134]という点で決定的なちがいがある、というわけである。

このような郷土教育運動批判のスタンスをとるいっぽうで、独自の歴史教育論を展開させながら、戦後の社会科教育に柳田が関与したのが、1953年に検定合格となり翌1954年より学校現場に採択された社会科教科書『日本の社会』の編集である。この教科書の基本的なアイデアのひとつとして、郷土研究の要件であった「小さな区劃」や「家の門の前、垣根のへり」など、子ども自身の生活における身近なリアリティからスタートする仕掛けがあるが、その前提としてもうひとつ、「史心」の育成という主題があった。これは単に歴史的センスを磨くという教育目標ではなく、「[時の順序]とか[ものの変遷]の意味で歴史をとらえさせ」、「過去だけを取り出したものではなく、未来・現在を含むもの」[関口 2012:173-174]をも指していたというから、因果論的思考や社会構想力といってもよいさまざまな能力が、「史心」の内実として想定されていたと考えられる。そしてその育成方法としては、「子どもが空間的な広がりから入り、時間的な広がりである歴史を認識させるという方法」[関口 2012:175]であり、さらに「社会科では「自分の周囲から隣へ、そこから遠くへとひろがってゆく」方法によって、子どもは歴史と地理の両側面から郷土の生活を

学ぶ」[関口 2012:176]というのが、柳田がイメージした実際の科目内容であったと関口は指摘している。

「自分の周囲から隣へ」といったフレーズは「家の門の前、垣根のへり」という郷土研究の要件とほぼ重なり、歴史と地理の合体した郷土教育という点においても、現在にまで連なる社会科副読本の基本方針を方向づけるかのような指摘である。より詳しく教科書『日本の社会』の構成をみると、そのねらいは、おもに三点あったことがわかる。

「①子供の身近な所から出発し、「歴史」を通して物事を考えさせる。

②人と人との関係や社会生活における共同の意味を学ばせ、「ものごとを正しく判断できる力」を身につけさせる。

③生活の場に注目して世の中のことを知るための方法を教え、「むかしの人たちの苦心のあと」を学ばせる」[関口 2012:185-186].

ここではとくに①と③に注目したい。子どもの身近な地域での事象、とりわけ現在の繁栄には先人の苦労や努力が結実していることに目を向けさせるような題材が副読本において取り上げられることが多いことと整合性をもっているからである。

この柳田國男の先進的な社会科教育への取り組みは、現在の社会科副読本の基本路線を直接的に用意したわけではない。「『日本の社会』が出た頃は、「学習指導要領」の改訂で社会科の方針が大きく変換した時期である。一九五八年度学習指導要領は、経験主義から系統主義に方針が変わり、学習内容も増加した。一九六〇年代に入ると、全国統一テストも実施され、学習指導要領に即した教科書通りに教えた方がテストに有利になることから、ユニークな社会科教育が実施されにくくなる。成城学園初等学校も一九六二年に文部省案に沿って社会科単元の大改訂を実施し、柳田社会科から離脱するという経験があった」[関口 2012:166]. このような文脈においてみれば、マス教育化と点数至上主義のもとでの柳田の社会科構想は、かならずしもマジョリティを占めるものとはならなかったのである。

しかしながら、身の丈から発した問いを自らの足元である郷土をじっくりと見定めることによって方法化しようとした「郷土で研究する」ことは、何らかの巨大なものを考えるための“縮尺法”，あるいは“換喩法”としての郷土という捉え方に納まりきるものでもなかるう。国家や外部世界を前提とした、郷土→国家→世界といった認識の拡張を特徴とする「縮図的郷土観」と郷土教育運動

とは一線を画するという指摘もなされているが〔岩崎・高野 2010:93-94〕、それは柳田のスタンスと大きくかけ離れることではないはずだ。なぜなら、「郷土で研究する」にはどうすればよいか、という問いに対する答えとしてしばしば用意されているのは、「郷土を研究することをつきつめるしかない」という常套句だからであり、「地域で」と「地域を」が交差する接点には、現在の副読本で扱われるような、地域の現実に根ざした身近で身の丈サイズの問題があるように思われてならないからである。動かされざる地域の現実というものは、当の地域住民にとっては、全体を見るための方便といって流してしまえるほどの軽々しさをともなっていないはずである。むしろ地域の問題に直面して取り組んでいかねばならない切実さをもって、はじめて柳田の言った「郷土で研究する」ことの有効性も生まれるのではないか。このような問題意識のもと、次節では実際の社会科副読本に記された枝下用水の記述に焦点をあてたい。

## 2. 副読本に描かれる枝下用水

前節でふれたような郷土研究に根ざした先進的な社会科教育への取り組みが現在の社会科副読本の基本路線を直接的に用意したわけではないとすれば、社会科副読本の源流はどこにあるのか。じつは副読本の歴史は厳密には明らかにされてはいないものの、一般的には1950年代後半と目されている。寺本潔によれば、第二次世界大戦後、戦後復興への情熱から教材作成の気運が高まり、交通や上下水道などの社会基盤整備による地域生活の向上や、過去の工夫や努力の上に成り立つ地域ごとの殖産興業などへ目を向けさせる教育課程が模索された。その結果、「地域の題材を事例にしながら学習させていく必要性が高まり、いわば地元立脚型の手づくりの教育課程として全国的なブームをもたらし」〔寺本 2011:38〕た社会科を中心とした学校ごとのカリキュラムが1950年頃から次第にととのっていったのである。戦後新教育の具体化は東京都や京都市などが早く、地域の特性を色濃く反映した社会科副読本が編集・作成されたが、現在確認できる範囲では、1953年6月25日に発行された『わたくしたちの港区』が戦後最初の社会科副読本「と思われる」〔寺本 2011:39〕とあえて暫定的に提示されている。

1953年版は役場資料としての市区概況といった印象を与え、小学生にはやや難解であるといった反省も踏まえ、翌1954年版では港区の自然、産業と労働、公共施設活動、交通などについて平易に書き換えられており、

フィードバックの早さに顕著なものがあることが着目される。と同時に「仮にこの本が日本最初であるならば、今日各地の自治体で編集されている『わたしたちの〇〇市』などの地域副読本の雛形になったと思われる」〔寺本 2011:44〕と指摘されている。

豊田市の場合、小学3年生を対象とした社会科副読本の初版が発行されたのは1965年であるから、寺本のいう戦後最初「と思われる」時期より12年たっている。

（表1）に示したのは、『矢作川資料研究第3集枝下用水120年史資料集その2』〔枝下用水120年史編集委員会編 2013:52〕に掲載されている豊田市の社会科副読本（資料集では「副教材」）の改訂一覧表である。資料集にも記されている通り、1982（昭和57）年度より<sup>4)</sup>、それまで3・4年合併編集がなされていたものが各学年別の編集となり、それが2002（平成14）年度には再び二学年合併編集となっている。そしてこの各学年別の編集方針がとられた1982年が、枝下用水の扱いにとっては転機となっている。つまり、それまでごくわずかであった記述は、4年生用分冊に集約され一気に24ページもの分量に増えたのである。

分量の増加だけでは枝下用水の副読本における意義がわかりにくいので、次に全体の目次構成における位置づけをみてみよう。（表2）は、大きな改訂がおこなわれたいくつかの版にしばり、全体の目次構成のなかでの枝下用水に関する記述セクションの位置をゴシック体で示したものである。上段が記述の大増量以前の三つの版、下段が大増量後の四つの版である。これをみると、枝下用水に関する記述が農業に関連する事項として位置づけられているのは1967（昭和42）年版のみであり、その後の1971（昭和46）年版より、「開かれていく郷土」や「郷土を開く」といった章タイトルに明示されているように、地域開発を扱うセクションに移行していることがわかる。さらに2002（平成14）年版では、「きょうどにつたわるねがい」という新たな括りが設定されている。ここには、暮らしの変遷、伝統行事、トヨタ自動車とならんで枝下用水の記述が配置されており、伝統的な生活を守りながらさらなる発展を企図するという形での温故知新的な生活願望や、単に先進的な開発一辺倒ではない地域創造がうかがわれる。

具体的な記述内容の変化に目を向けてみよう。わずか数行の記述に限られていたころには、「また、豊田市の西のおかを、南北にながれているのは枝下用水で、西澤真蔵が中心になってつくりました（明治二十六年）」



表1 「豊田市小学校社会科副教材年次比較」(『矢作川資料研究第3集枝下用水120年史資料集その2』掲載)。

発行年	版	書名	対象学年	全頁数	枝下用水の記載		トヨタ自動車の記載	
					頁数	頁	頁数	頁
昭和40年4月7日	初版	-	-	-	-	-	-	-
昭和42年4月1日	改訂 再版	のびていく豊田市	3年	94	1(4行)	20	4	31~34
昭和43年4月1日	改訂 3版	のびていく豊田市	3年	124	1(3行)	25	8	40~47
昭和46年4月1日	改訂 4版	とよた	3年	175	1(2行)	166	9	20~28
昭和49年4月1日	改訂 5版	とよた	3年	175	1(2行)	166	9	20~28
昭和53年3月20日	改訂 6版	とよた	3年・4年	195	5	177~181	3	68~70

発行年	版	書名	対象学年	全頁数	枝下用水の記載		トヨタ自動車の記載	
					頁数	頁	頁数	頁
昭和57年3月20日	改訂 7版	とよた	3年	151	なし		20	42~57, 86~89
昭和61年3月20日	改訂 8版	とよた	3年	149	〃		20	42~57, 86~89
平成元年3月20日	改訂 9版	とよた	3年	149	〃		16	42~57
平成2年3月20日	改訂 9版	とよた	3年	149	〃		18	42~59, 86~89
平成4年4月1日	改訂 10版	とよた	3年	149	〃		23	103~120, 140~144
平成8年4月1日	改訂 11版	とよた	3年	132	〃		6	85~90
平成12年4月1日	改訂 12版	とよた	3年	132	〃		6	85~90
平成14年4月1日	改訂 13版	とよた	3年・4年上	74	〃		なし	
平成16年4月1日	改訂 14版	とよた	3年・4年上	74	〃		〃	
平成19年3月31日	改訂 15版	とよた	3年	130	〃		〃	
昭和57年3月20日	改訂 7版	豊田	4年	105	24	70~93	〃	
昭和61年3月20日	改訂 8版	豊田	4年	105	24	70~93	〃	
平成元年3月20日	改訂 9版	豊田	4年	105	24	70~93	〃	
平成4年4月1日	改訂 9版	豊田	4年	126	22	67~88	24	89~112
平成8年4月1日	改訂 10版	豊田	4年	127	18	79~96	24	97~120
平成12年4月1日	改訂 11版	豊田	4年	127	18	79~96	24	97~120
平成14年4月1日	改訂 13版	豊田	3年・4年下	164	18	89~106	24	107~130
平成16年4月1日	改訂 14版	豊田	3年・4年下	164	18	89~106	24	107~130
平成19年3月31日	改訂 15版	豊田	4年	148	20	59~78	18	79~96

7版から分冊  
初版については未見

[枝下用水120年史編集委員会編 2013:52]

表2 副読本各版の目次構成における枝下用水の記述。

S42年版	S46年版	S53年版	
一、わたしたちの豊田市 二、豊田市ののうか (六) 用水 三、豊田市のみせ 四、豊田市のこうば 五、豊田市のこうつう 六、すみよい豊田市 七、市民のくらし 八、豊田市のうつりかわり	一、わたしたちの豊田市 二、人びとのしごと 三、けんこうであんぜんなくらしのくふう 四、市の人たちのくらしと市やくしよのはたらき 五、豊田市のうつりかわり 六、これからの町づくり 七、豊田市と県ちようのある名古屋市 八、わたしたちの愛知県 九、開かれていく地いき (一) 台地に用水をひく (二) 矢作川の開はつ	一、学校のまわりのようす 二、人びとのしごと 三、豊田市のようす 四、県内のいろいろな町 五、市のうつりかわり 六、けんこうな生活 七、安全な生活 八、みんなが使うしせつ 九、開かれていく郷土 (一) 台地に用水をひく(むかしの開発) (二) 矢作川すう合開発(新しい開発)	
S57年版	H4年版	H8年版	H14年版
一、けんこうでゆたかな生活 二、安全な生活 三、人々のくらしをよくするために 四、開かれた郷土 (一) 枝下用水開く (二) 挙母開たく	1. けんこうなくらし 2. みんなの安全 3. 郷土を開く 1 枝下用水を引く 2 トヨタ自動車をきずく 3 新しい開発	1 住みよいくらしをささえる 2 安全なくらしを守る 3 わたしたちの愛知県 4 きょうどをひらく 1 枝下用水を引く 2 トヨタ自動車をきずく 3 新しい街づくり	3 くらしをまもる 4 住みよいくらしをささえる 5 きょうどにつたわるねがい 1 くらしのうつりかわり 2 昔からつたわる行事 3 枝下用水を引く 4 トヨタ自動車をきずく 6 わたしたちの県

表3 枝下用水に関する記述の小見出し一覧.

S53.3.20	「明治用水取り入れ口の見学」, 「水ぶそくになやむ台地」, 「用水をつくる」, 「用水路工事のようす」
S57.3.20	「見学の計画」, 「見学」, 「水ぶそくになやむ台地」, 「年表を使って」, 「用水ほりをしようと考えた人々」, 「西枝下から四郷までの用水工事」, 「工事の様子」, 「取り入れ口や竈川との交差点」, 「計画を引きついだ人々の考え」, 「西沢の考え方」, 「ふえてきた田」.
S61.3.20	上記「西沢の考え方」まで同じ. あと, 「ふえた田」, 「このごろの枝下用水」
H4.4.1	「用水の見学」, 「水不足とたたかう人たち」, 「用水ほりの計画」, 「取り入れ口の工事」, 「大石堤を作る」, 「すばりの用水」, 「今の用水とくらべて」, 「工事を引きついだ人たちの考え」, 「西沢の考え方」, 「ふえた田」, 「このごろの用水」, 「パイプライン」, 「まとめの学習」. (この版より横書き)
H8.4.1	「水不足に苦しむ」, 「田に水をおくる枝下用水」, 「用水工事のはじまり」, 「時田光介たちにひきつがれた用水工事」, 「西沢真蔵と枝下用水」, 「「よだれ用水」とよばれた枝下用水」, 「こう水をふせぐ努力」, 「枝下用水のうつりかわり」, 「枝下用水をパイプラインに」, 「水を大切に」, 「枝下用水ができるまでを紙しばいにまとめよう」.
H19.3.31	「用水って何だろう」, 「枝下用水の様子」, 「枝下用水ができる前」, 「用水工事の始まり」, 以下, 同上

[昭和42年版], 「これとおなじころ, 北に枝下用水がひかれ, 両方で一万ヘクタールの田がひらかれました」 [昭和46年版] などであったものが, 5ページの記述となった昭和53年版では「明治用水取り入れ口の見学」, 「水ぶそくになやむ台地」, 「用水をつくる」, 「用水路工事のようす」という小見出しが設けられ, 明治用水と合わせて用水開削の記述がなされている. この中で枝下用水に特化した記述は, 「いまから, およそ九十三年まえ, 越戸・花本・荒井に用水をひくために, 県と地もとが, ひ用を出し合って, 西枝下から四郷の唐沢川まで, 八キロメートルの用水を, ほったのがはじめでした. 明治用水がひかれると急に, 豊田市の南部に用水をひく話ができ, 県の仕事としてはじめられました. と中で中止したので, 西澤真蔵らが, 工事をひきつぎました. 工事でむずかしかったのは, 川をわたす工事でした. 木のといでわたしました. 三年後・永覚新郷まででき, つづいて, 中用水・西用水ができて, 枝下用水はほとんどできあがりしました. 明治用水と枝下用水は, とともに矢作川から取り入れていたので, 取り入れる水量のことで, 争いがつづきました」 [昭和53年版: 181] というコラムである.

記述が大増量された1982 (昭和57) 年版以降の記述は, 逐一引用することができないので, (表3) に小見出しの比較をまとめた. 1978 (昭和53) 年版の5ページの記述は, その後の24ページの記述のパイロット版のような役割を果たし, 開削工事の様子までをフォローしている. 1982 (昭和57年版) では, 具体的な地名をあげて開削工事の状況を再現したり, 計画推進者とりわけ西澤真蔵の「考え方」という開削事業の内実に向けるような記述もなされている. 以降の記述は, この1982 (昭和57) 年版が基本となりマイナーバージョンアップされ

る形で版が重ねられる. その中でも, 1992 (平成4) 年版には「すばりの用水」という当時の工事を詳らかにする小見出しとともに, 1989年の枝下用水地区の県営水質障害対策事業 (水質保全対策事業) による「パイプライン」化の動きも新たに小見出しとして追加され, 新旧技術の対比がなされるようになった. また1996 (平成8) 年版では, 先行する版による学習によって, じっさいに児童によって作成された紙芝居を新たな教材として組み入れるなど, 教室と直結したフィードバックもおこなわれている. 先に『わたくしたちの港区』でもみたように, フィードバックの迅速さは副読本の利点の一つであることがここでも確認できる.

教員用の副読本には「指導の手引き」が付されており, そこからじっさいに教室での活用のされ方を読み込むことができる. 記述の大増量となった1982 (昭和57) 年版には, 以下のような教育目標が記されている.

「1 人々の生活の向上を図るため, 豊田市の開発や保全につくした先人の働きについて理解させる,

2 これらの理解を通して, 豊田市の発展を願う態度を育てる.

3 豊田市にある過去の事業を, 見学・聞きとりなどにより, 具体的に観察させるとともに, 具体的資料の特徴を考えながら効果的に活用させる」 [昭和57年版教員用副読本, 傍点原典]<sup>5)</sup>.

とくに第3の具体性をもたせる指導方法については, じっさいに見学に出かけるための候補地として, 「・枝下用水記念碑, 枝下用水取水口 (平戸橋町)・竈川と枝下用水の交叉箇所 (四郷町), (サイフォン)・西澤真蔵の碑 (下林町・土橋町)・用水路分岐点・用水路支線からの取水口・放水門・用水受益値など」があげられてい

る。さらに、

〔(1) この学習は、位置的に遠い所が多いので、資料中心の学習になりやすいが、講義式にならないように、特に留意したい。

(2) 遠足など校外学習と合わせて見学計画を立てるのも、一方法である（枝下用水の旅）〔昭和57年版教員用副読本、傍点原典〕。

といったその他事項も記載されており、いかに児童自身の身近な事象から具体的な問題意識を引き出すかについて工夫された教材であるかがわかる。

このような指導の理念型が現場ではどのように実践されていたかという運用の実際について、挙母小学校の八木順子教諭（当時）のインタビューから探してみたい。じつは1982年版の枝下用水に関する記述の大増量には、挙母小学校のそれ以前の教育実践が深く関わっている。八木教諭が挙母小学校に赴任して数年後、はじめて4年生を担当することになった1975年前後、ちょうどその前年に4年生を担当したH教諭が枝下用水を教材とすることを試みていた。また同僚のW教諭は、当時社会科教育が重視されるのに対応してできた「社会科初志の会」という全国組織に参加し、地域教材に関する情報交換などもおこなっていた。この三人の教諭が中心になり、1977年頃から枝下用水を教材化したものを挙母小学校だけで用いはじめた。その直後ごろに、豊田市教育委員会から社会科副読本『とよた』の改訂の話がもちあがる。副読本の編集に関しては、教育委員会から豊田市内に15あった中学校区をブロックとして、そのブロック単位に社会科主任が集まって相談し意見集約したものをもとに、全体の構成が決められていく。W教諭が挙母小学校が属する第4ブロックの主任であったことも関係してか、挙母小学校での枝下用水を用いた取り組みが「開かれた郷土」の一節となったのである。

この地下だと社会科勉強するには、枝下用水ってこの上だもんね。ここ通っていだから（…）、この勉強にはすぐ子ども連れてって見学もできるし、ここの上流のほうに見学に行ったりで、一番最初に取り組んだのが挙母小学校。（…）それをやって初めて社会科の部でやっぱり『とよた』に載せなきゃいかんじゃないかっていうことで、副読本に。

自分とこの学校が枝下用水とまったく関係ないとこの3・4年生の先生は使わん。（…）自分とこの地元のことを選んでやるから、枝下用水のことなんか

やったって（子どもが）わからへんもんで。そういう意味で（それまで）載らなかったのもわからんでもないだよ。自分とこの地下で教材を探してやっとなかもしれん。けれど、枝下用水調べてみるとかなり下まで、青木あたりからかなりの学校数を巻き込むってことがだんだんわかってきたかな。それで、副読本へ詳しく載せようって、資料もあるからってことで、やるようになったと思う。〔2012年5月31日インタビュー、()内は中略もしくは筆者による補語〕

八木教諭はもともとから副読本を用いた教育に精通していたわけではなかった。挙母小学校に赴任する前には枝下用水からは離れた別の小学校勤めであったが、そのころは副読本の記述内容にもあまり気を向けることはなかったという。だから「はっきり言えば、あまり力入れん先生は『とよた』副読本を読んで終わってた」という現実認識もある。それに対して挙母小学校では副読本の執筆に先立って教育実績も積み、資料収集もかなり先行していたので、社会科主任の会合でも具体的な提案ができたのだろう。さらに、1982年版から二学年分冊となり、記述スペースが大幅に増えたことも、枝下用水に関する記述の大増量には利したと考えられる。

挙母小学校の教育実践がすすんでいたというのは、郷土教材を指導する際の体験学習という点でも顕著なものがあつた。先に「指導の手引き」のその他項目(1)講義式にならぬようにすること、(2)「枝下用水の旅」の二点を引いておいたが、じつはこれも挙母小学校ですでに実践されていたことを下敷きにしたものであつた。

あの当時、社会科っていうと本読んで歴史でも何でも理解していくようなのが多かった。だんだん、そんなじゃだめで実際に体験を得るとか見学を入れて子供たちに考えさせるような学習させないってというのがでてきたから。結局社会科っていうのは（教科書や副読本には）載ってないわけだよ。こらへんにあるもので実際に見にいったら、用水を掘ることのえらさんかを実際に学校で掘って体験させようとかね。（…）だからH先生は用水堀の仕方かなり詳しく調べてあれしたみたいだけど。結局そこへ行くとわかるけど、あんな山の中をよくやったっちは思うわけ。掘ってって、もちろん手堀りだよ。掘ったあとに、アカマツをひくみたいね。アカマツが一番腐らんらしい。アカマツをひい



て、それでも素掘りだわ。ほのままで雨が降ると全部崩れちゃうし、狭くなったとこ水があふれちゃって被害が出てくるってことになっちゃうけど、そのあたりの苦労みたいなのを、H先生は体験学習として実践させた。私はそっちの方に行かんで西澤真蔵さんの方へ行った。実際の体験は子供たちにみんな一日かけて歩かせた。弁当持って。現在の枝下用水の地形的な問題、上流から下げんように、位置を下げんように来ないかんから、かなり大回りするわけね、地形にそって。まっすぐやると落ちちゃうから、南の方へやれへんから、遠くに送るためにずっとぐるっと迂回してるっちゅうのをわからせるために歩いて体験させた。もう1日あっち行くと水源のあたり、越戸ダムのあるあたりには石碑があるんだね、西澤真蔵さんの。(…)向こう側行って、向こう側岩盤があるもん、もっと苦労しただよ、こっちよりも違う苦労して、あそこらへんも地下の人はかなり夜逃げしてひどかったっちゅう話も行くと聞けるもんだから。あの当時、そういう聞きとりしてきたすごい苦労した、こんな人があんな遠くの近江商人だったっちゅう話に、私はもってったけどね。

[2012年5月31日インタビュー、()内は中略もしくは筆者による補語]

やや冗長になりながらもインタビュー記録を引用したのは、ひとつには副読本へと結実していく教育実践の現場での活動内容がよくわかる描写だからである。枝下用水という教材が、いかに座学では納まりきらないクオリティであったかが端的にあらわれている。と同時に、教員一人一人がそれぞれの得意分野を持ち寄って、ある意味競い合うように有効な学習法を試みている状況が、その後の副読本における枝下用水の記述に反映されていることがわかる。いまひとつ、これは学習を究極の目的においた手段としての体験というより、もはや体験そのもの、あるいは、枝下用水の運動にからめとられていってしまうような体験の同調が見いだせるのではないだろうか。前節の最後に記した「地域で研究する」と「地域を研究する」が交差する接点にこそ、枝下用水の歴史を学んでいるというより、枝下用水と地続きになっていくような体験そのものが位置するといえる。

当時の挙母小学校における教材研究の活発さは、前節でとりあげた「小さな区劃」や「家の門の前、垣根のへり」から始める郷土研究というものが、児童・生徒のみの視線を示していたのではないことも気づかせてくれる。教

材作成のために奔走していた教員自身が自分の身の回りからという地域教材の目線をもっていたことを示す語りを、本節の最後に紹介したい。八木教諭がビデオ撮影のため、水の苦労が特に激しかった用水の流域を調査しているときであった。

一番聞きに行って感動したのは、私ら田んぼのあぜみちを歩いて行って、後ろからカメラがくるだけだね、田んぼの中にいる人が嫌がるのね。で、実は西澤真蔵さんの映画を作らなかんもんで来て、話を聞きたいんだけどちゅうと、ほんときに嫌な顔がとたんに変わって、どうぞどうぞって、ほれはびっくりしたね。いまだにこの人の名前は農家の人にとっちゃあれなんだなっちゅうのは思った。[2012年5月31日インタビュー]

### 3. 考察と展望

小学校中学年において、地域の形成や発展に貢献した人物を取り上げ、その苦労や業績をたどり、現在の地域の様相を歴史的に理解するための単元は一般に「開発単元」とよばれる。前節で取り上げたような豊田市副読本における枝下用水と西澤真蔵の記述も、この開発単元としての意味があった。泊善三郎は現行の学習指導要領にのっとして、「用水路の開削や開拓などを行って地域を興した人、藩校や私塾などを設けて教育を発展させた人、新聞社を興したり新しい技術を開発したりするなど文化を広めた人、地域の農業・漁業・興行などの産業の発展に尽くした先人など」を「地域の発展に尽くした先人の具体的事例」として、それが埼玉県下の小学校においてどのように取り扱われているかを調査している。

70市町村から各1校ずつをサンプリングして、「各学校の指導計画や市町村で作成している社会科の副読本に取り上げられている人物が学習の対象になっている」[泊2008:72]割合と取り扱い校数を出しているが、それによると、用水路開削11名・45校、新田開発8名・12校、河川改修7名・7校、殖産興業8名・13校、学芸2名・2校、その他3名・3校となっており、用水路開削が最大である<sup>6)</sup>。そのなかでもとりわけ、見沼代用水を引いた井沢弥惣兵衛は33校(47%)でとりあげられているという<sup>7)</sup>。

また学習展開にも特徴がある。①導入の仕方(写真や古地図を見せる)、②昔の様子や人々の願い(湯水、洪水、飲料水不足など)、③工事の様子や工夫(人力での工事の仕方や当時の工具)、④完成後の様子(水の安定供給

による新たな耕地の拡大と収穫の増大)の諸点であり、部分的に欠落しているものもあるが、大半の副読本ではこの4点が記述の柱となっているという[泊 2008]。

枝下用水の記述も、このプロットに適合している。(表3)の小見出し比較で確認すると、①は見学が取り上げられ、②は「水不足になやむ台地(人びと)」といった開削以前の問題点の描写、③は「用水ほりをしようと考えた人びと」など計画の話と、「工事の様子」、「すばりの用水」など、当時の工事技術とその苦労の話、④として「ふえた田」といった直接的な恩恵のほか、時代が下るにつれて防災やパイプライン化などの側面も描かれるようになった。西澤真蔵と枝下用水の歴史は、地域教材としてのスタンダードをそなえていたという点においても、社会科副読本のコンテンツとして優れていたということができよう。

しかしここで急いで付け加えなければならないことは、学校教材としての枝下用水が、決してルーチンワークによって生み出されたものでも、既成のテンプレートに題材を当てはめるようなものでもなかったということである。ここでとりあげた西澤真蔵と枝下用水の物語は、そもそものはじめから社会科教材として用意されてきたものではなかった。

私らがやる前に調べたときに上郷、南のほうで水がなくて、上郷のほうの先生が道德に使ったと、道德に西澤真蔵さんを。でね、スライドだったか、昔の2・3枚のスライドで、西澤さんが苦労して、要するに不撓不屈だわ。ほいから、みんなのため、自分の利益じゃなくてみんなのためにすることの素晴らしさっていうか。そんな道德教材で子供たちに教えて、それを「わしゃ聞いたぞ昔」ちゅうっ人がおった。だから、西澤真蔵さんの話は豊田市中に広がる前に上郷のあたりでは受け継がれ、石碑のあるあたりでは引き継がれていたし、石碑のあるあたりは必ず、掛け軸、西澤真蔵さんの顔の、あれが持ち回り。区長さんが次の区長に持ち回り。ほいで年に1回、供養するちゅう、それになってるっていうのは聞いた。[2012年5月31日インタビュー]

西澤真蔵が学校教育において発掘された一等最初は、道德教材としてであったのである。それが地元郷土の題材を活かした教材づくりという文脈におかれたとき、社会科の副読本にもなりえたというわけである。そしてそれが奇しくも、第1節で検討したような、柳田國男の指

向した郷土教育、すなわち地理と歴史をいっしょに学ばせ、郷土の先人が苦労した事跡に学ばせるという「郷土で研究する」やり方としても見いだしうるのである。つまり初期の段階では、道德にも社会科にも適用可能なコンテンツであり、「地域を」考えるためには最適、というより不可欠であった枝下用水や西澤真蔵に対するスタンスを貫徹することで、「地域で」考えることへと突き抜けていく可能性も拓けてくる逆説的位相がそこには見いだされるのである。この可能性を、さいごに展望もしくは今後の課題としてまとめておきたい。

まず、挙母=豊田市という地域的個別性や、高度経済成長期における生活変容の社会史を背景として考えた場合、社会科副読本のユニークな位置づけに光を当てることができよう。図書館等に所蔵されておらず今回は管見のおよばなかった豊田市社会科副読本の初版は1965年であるが、この時代、直前の1962年には第一次全国総合開発計画が打ち出され、さらにそれ以前の1959年にはトヨタ元町工場の操業をうけ、挙母市から豊田市への市名変更という地域にとってはきわめてインパクトの大きなできごとが起こっている。その含意するところは、工業への労働力人口の傾斜と、挙母=豊田の地域アイデンティティの揺らぎであったともいえよう。全総は地域間の均衡ある発展を図りながらも拠点開発方式によって新作業都市や工業整備特別地域を全国に作り出していったがために、農村の労働力が不足する事態が生じた。さらに豊田市設立によって、枝下用水流域には地域アイデンティティの危機とはいわないまでも、地域アイデンティティを表象するシンボルへの希求が高まっていた時期が、豊田市で最初に副読本が刊行された1965年と奇妙な一致を見せているのである。

このことは、安城・岡崎といった隣接地域との対比として考える方向性を暗示していよう。1926年、枝下用水普通水利組合は明治用水普通水利組合と合併し、翌年、明治用水土地改良区枝下用水地区となった。明治用水土地改良区より分離して枝下用水土地改良区が設立されるのが1968年であるから、副読本において枝下用水の記述が見られ出すのはその直前のことである。ようするに、安城・岡崎という隣接地域において、日本三大農業用水<sup>8)</sup>のひとつとして数えられるほどに喧伝される明治用水に対して、その明治用水から分離独立した豊田オリジナルの農業用水としての枝下用水を表看板に用いるといった筋書きが読みとれる。

しかし安城・岡崎が明治用水でメジャーを誇るなら、豊田市においてメジャーを指向するものとして、トヨタ



自動車は選択肢にならないであろうか。じっさい社会科副読本には学年配当の移動があったにせよ、トヨタ自動車に関しては「殖産興業」の事例として扱われることもあった。しかしながら、トヨタ自動車は市名を改めさせるほどのインパクトを持ち得たわりには、副読本教材としてはむしろ裏目に出た感が否めない。「たぶんトヨタ自動車は全国版になってっちゃうから、5年生の工業学習に入るの。もう何もせんでも教科書会社が入れちゃうの」[2012年5月31日インタビュー]と言われるように、出来事そのものとしては殖産興業という副読本にふさわしい内容でありながら、あまりにも全国規模になりすぎたため、あえて副読本でとりあげるまでもないセカンドチョイスのコンテンツになってしまうのだ。

このように、かたや明治用水、かたやトヨタ自動車といった地域表象群と並列させてみると、枝下用水の特異なインパクトが確認できよう。つまり隣接地域との対比として明治用水vs枝下用水という構図が外的要因としてあり、同一地域内ではトヨタ自動車vs枝下用水という対比が内的要因としてあるわけである。社会科副読本の記述においては、西澤真蔵の人物伝が都築弥厚、豊田喜一郎と並行して記述され、一種のバランスシートの上に描き出されているのをみても<sup>9)</sup>、教材作成者の苦労がうかがわれるところである。

もっとも、このような地域シンボルの表象化は、当事者の意図を抜きにして過剰な読みにばかり走るのは危険なことであろう。その意味では、教材作成者たる小中学校教員は、まずは児童・生徒の目線で取っつきやすく理解しやすい教材を心がけ、「とにかく地域にあって身近なものをのを、使えるものとして使う」という徹底した地域現物主義が枝下用水が教材として成立した背景にあったことは動かされざる事実である。しかし同時に、豊田という地域が隣接地域や同一地域内の工業事業との関係において、これまで述べてきたような展開をみせてきたことから、自らのよりどころを表明するものとして枝下用水を意味づけようとする意志がみられたことも事実であろう。

それを後ろ立てる事例が、豊田土地改良区の枝下用水通水100年事業として『しだれ用水』という百年史が編まれたことであった。「(土地改良区は)学校に配りたいていわれた。学校に資料として何十冊か渡すつもりでおるって、そう言われた。だから学校の子どもたちが50冊あったかな? 各学校ね。最初からもうそういう事業にしたいと、100年のあれは」[2012年5月31日インタビュー]と語られるように、『しだれ用水』という記

念誌は異色の編集がなされている。通常、土地改良区の百周年事業などで刊行される記念誌は、筐体の重厚な装丁で、歴代の役員等が編年体で並べられるような内容が想定されるはずだ。ところがこの『しだれ用水』は、当初から若年層の読者を想定して、内容的にも社会科副読本のロングバージョンのような物語風の記述がなされているのである。明らかに枝下用水や西澤真蔵でもって自らの地域を表象したい、次代に伝えたいという意図を読みとることができるのである。

このように考えれば、枝下用水をめぐって「地域を」考えることと「地域で」考えることとの狭間には、多種多様なファクターが介在していたことが理解できるであろう。一方には三大農業用水・明治用水によって潤わされる農業先進地域としての安城・岡崎との対外的関係があり、もう一方には地域住民に少なからぬ現金収入を生じさせ、作物から現金へという戦後農業の推移・転換に対応していくきっかけとなったトヨタ自動車との関係があった。このことは、戦後農村社会の地域的成り立ちを考える上で、きわめて示唆的なくつかの課題を示しているように思われる。たとえば農家各戸における農業経営から、用水事業を通して利害が地域共同体において共有される農村経営、そしてさらには農地の工業用地への転換や高度経済成長をふくんだ国家の産業政策というかたちで、私事から公事、国事へとつらなる一連のスペクトラムのなかに枝下用水を置いて考えることも今後の課題である。このようなさまざまな間(あわい)を縫って枝下用水が流れるさまは、その大がかりな見取り図の全体像を社会科教材だけから浮かび上がらせるには拙速だろうが、その行く末を、いましばらくながめてみる必要があるであろう。

## 謝辞

本稿を成すにあたり、ご多忙なかインタビューにお時間を割いて下さった八木順子さんに感謝申し上げます。また資料収集にひとかたならぬお世話になった枝下用水120年史編集委員会のみなさまにお礼申し上げます。

## 注

- (1) 本稿で主にとりあげる豊田市社会科副読本は、以下の通りである。『のびていく豊田市』(昭和42年版, 43年版), 『とよた』(昭和46年版, 49年版, 53年版), 『豊田』(昭和57年版, 61年版, 平成元年版, 4年版,

8年版, 14年版, 19年版).

(2) 本稿ではおもに(引用以外では)「副読本」と表記する。「副教材」と称することもあるが, 教科書=主なる教材というニュアンスを回避したがためである。

(3) この指摘においては, 民俗学が成形される途上で作成された百の調査項目についても検討されている。その中で注目されている村の中で模範とすべき人物や家筋に向かう問題意識については, 本稿の後半で道德教育の題材としても地域教育は用いられる可能性という形でリンクしていると考えられる。

(4) 本稿では年代表記に関して, 一貫して西暦を用いているが, 豊田市社会科副読本に言及する際には, 例外的に元号表記もしくは西暦・元号併記をすることもある。

(5) (表2)の目次構成比較において, それまで地域開発に関する章におかれていた枝下用水の記述が, 平成14年版になって「きょうどにつたわるねがい」という章に含められるようになったのは奇異な観があったが, この教育の句表の中で「豊田市の発展を願う態度を育てる」というねらいが設定されていたことを考えると, それが平成14年版になって形をなしたと考えることもできる。

(6) 全国土地改良事業団連合会の編集・発行による『副読本に見る郷土の歴史』では, 全国の230冊におよぶ副読本を渉猟した資料整理の労作である。ここには名主・庄屋などの村の有力者や郷土の偉人などに関する記述も取り上げられているが, 大半は農業用水に関するものであり, 割合としては泊の埼玉県調査を凌駕するであろう。本稿ではこの資料を十分に有効利用できなかったが, 枝下用水に関しても取り上げられており, 全国の郷土資料との比較という今後の課題を投げかけている。

(7) 33校のうち約半数の17校は, 用水流域でないにもかかわらず取り扱われるという指摘もなされている。地域教材を副読本として編集する際の地域特性の偏りという問題は, 豊田市における枝下用水の流域と遠隔地とのあいだで副読本の取り扱いが異なっていたという先の指摘とも関連する点である。

(8) 葛西用水(埼玉・東京), 見沼代用水(埼玉・東京)とならんで明治用水は「日本三大農業用水」と称される。「三大」ものの常で諸説あり, 「農業」を冠さない「日本三大用水」の場合は, いずれも江戸時代初期建設された辰巳用水(金沢), 玉川上水(東京), 箱根用水(静岡)の三つをさす。

(9) 都築弥厚との並列的記述は昭和53年版まで, 用水関連教材が5ページあたりまでに押さえられていた段階で明治用水と対比させる形での枝下用水の記述においてみられる。また豊田喜一郎に関する記述は, 平成4年以降, トヨタ自動車でひとつの単元が編まれる構成が3年生の副読本に戻されてからの内容がそれに相当する。そこには築き上げた財産消失のリスクを顧みずエンジンの開発に励む豊田喜一郎の「偉人伝」が描かれている。これは, 私財を投じて用水開削を成し遂げた西澤真蔵の記述モードと重ねて読まれることが想定される。

## 参考文献

- 岩崎正弥・高橋孝子(2010)場の教育「土地に根ざす学び」の水脈. 農文協.
- 枝下用水120年史編集委員会編(2013)矢作川資料研究第3集枝下用水120年史資料集その2, 豊田土地改良区, 愛知.
- 関一敏(1993)しあわせの民俗誌・序説. 国立歴史民俗博物館研究報告, 51:313-347.
- 関口敏美(2012)柳田國男の教育構想 国語教育・社会科教育への情熱. 塙書房.
- 全国土地改良事業団連合会編(1992)副読本に見る郷土の歴史. 同会発行.
- 寺本潔(2011)戦後最初の社会科地域副読本と思われる『わたくしたちの港区』の内容と価値. 玉川大学教育学部紀要 論叢, 2011:37-46.
- 泊善三郎(2008)小学校社会科「地域の発展に尽くした先人の具体的事例」の指導について. 文教大学教育学部紀要, 42:69-78.
- 野澤秀樹(2008)柳田國男と小田内通敏 —「郷土研究」をめぐって—. 放送大学研究年報, 26:127-142.
- 柳田國男(1925[1976])青年と学問. 岩波書店.

〔中京大学現代社会学部：  
〒470-0393 豊田市貝津町床立101〕